様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 21 年　6 月 16 日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2006～2008
課題番号：18520302
研究課題名（和文）　中国語普通話文法の形成及び多様性に関する基礎研究

研究課題名（英文）　A research on the formatioan and diversity of Putonghua Grammar

研究代表者
町田　茂（MACHIDA SHIGERU）
山梨大学・教育人間科学部・准教授
研究者番号：20238926

研究成果の概要：
中国語普通話成立以前の明清時代を中心とした口語資料を分析した結果、そこで生じていた文法現象が現代普通話に継承される際のいくつかのメカニズムを明らかにすることができた。現代普通話は、既に文法化が進んだ要素の一部を排除すると共に、残した要素の文法機能を明確化することで文法体系を精密化させてきた。普通話を母語とする中国語話者の規範意識に大きな揺れが生じる背景として、精密化の一方における過去への回帰現象がある。今後の普通話文法の研究はこうした歴史的背景をより重視する必要がある。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2006 年度	1,000,000	0	1,000,000
2007 年度	500,000	150,000	650,000
2008 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	2,000,000	300,000	2,300,000

研究分野：言語学
科研費の分科・細目：言語学・言語学
キーワード：中国語　普通話　官話

１．研究開始当初の背景

現代中国語文法は共通語とされる普通話を基準として記述されているが、普通話の規範自体に曖昧さがあり、話者により「言える」「言えない」という判断に大きな揺れが生じている。しかしながら、これまでの文法研究において、この揺れが生じる原因についてあまり追究されてこなかった。ややもすると、話者の普通話の水準そのものを疑ったり、特定の話者の判断だけを基準に文法記述が行われてきた。そこで、本研究では、ひとまず規範的かどうかという発想をとりやめ、規範意識が生じる以前の中国語文法の実態を観察することにした。

ここで言う普通話は、中華人民共和国において 1950 年代に共通語として提起されたものであり、その後大量の普通話教科書及び辞書類が出版されている。提起後約半世紀の紆余曲折を経て、文法記述におけるテクニカルタームや基本的文法構造への理解はかなりの程度統一に向かいつつある。この普通話の基礎とされたのが北方方言であるが、北方方言が分布する地域は極めて広く、内部における差異も決して少なくない。また、北方方言

が異なる方言話者の間での便宜上の共通語としての地位を獲得したのは 19 世紀中ごろ以降だとも言われている。こうした事情により、現在普通話の話者であると自認する人々の間での規範意識にはかなりの差異が認められる。別の見方をするなら、普通話話者における「理解語」の範囲が広く、その中には特定話者にとっては非規範的なものがかなり含まれているということである。

普通話という規範意識が成立する以前の中国語の実態を知る上で、明清時代のテキストが重要となる。かつては閲覧さえ困難であったテキスト資料が、近年では容易に入手できるようになった。そこでこうしたテキストに見られる文法現象と現代普通話に見られる文法現象を比較することにより、現代普通話における揺れが生じる原因やその理論的意味を解明することにした。

２．研究の目的

現代の普通話において多様な意味を表す文法構造について、明・清時代の口語資料を中心に用例を収集し、規範意識が生じる以前から存在していた文法の多様性やそれらの現代における残存状況を具体的に記述する。これにより、現代において規範的かどうか判断が揺れる原因を歴史的言語事実により実証的に解明する。また、こうした事実が示す中国語の特徴や、言語一般を対象とした言語理論から見た中国語の位置づけについても考察する。

３．研究の方法

明・清時代を中心とする口語資料から用例を収集し、現代の普通話から見ると非規範的と思われる用例と現代でも規範的な用例がどのような原則により使用されていたのかを分析する。用例のうち電子データで処理できるものは検索機能を積極的に活用し、分類されたデータを電子ファイルに収集する。

一方現代の普通話における文法現象についても詳細な記述を行い、明・清時代の用例との比較が行えるようにする。比較の結果、現代普通話の多様性を生む原因を事実に基づき解明していく。

電子データを活用するため、WindowsXP 多言語版を基本ソフトとした電子環境を構築する。

４．研究成果

本研究は電子環境の構築及び電子資料の入手から着手した。そしてその後は、電子資料や活字資料を用いた用例の収集及びその分析により多くの労力を使った。明清の電子資料を扱う際、電子資料の性格、具体的にはその元となる版本や電子テキスト化する際の誤記などが問題となる。そのため、活字資料が入手できる場合は、電子資料によって得られた用例を活字資料によって再確認することにした。

用例を収集・分析する過程では特に「数詞＋量詞」の意味・用法の多様性に焦点を当て、詳細な分析を行った。その結果、以下のような知見を得た。

(1) 現代中国語における「数詞＋量詞」構造は多機能であり、多くが以下のような計数以外の目的で 用いられている。
①同一事物中の一個体にアクセスすることにより、名詞が表す意味を抽象概念から具体的個体を指示することに変化させる。ここには、以下のような派生的用法も含まれる。
事物の属性・特性の活性化
一個体を通して類全体にアクセス
②非個体にアクセスする。ここには以下のような派生意的用法も含まれる。
集合体の属性の活性化
動作の具体化
③焦点化。発話現場に存在する事物にスポットライトを当てるもので、以下のような派生的用法も含まれる。
唯一性が高い個体の焦点化
抽象概念の焦点化
①～③は特に量詞「個」において顕著である。

(2) 量詞がその基本義として計数機能を有することは論をまたない。しかし、現代中国語においては、「数詞＋量詞」構造、特に「数詞＋個」は、(1)で示したような計数以外の目的で用いられることが非常に多い。「数詞＋量詞」がこのように多機能になったのは、決して歴史的に新しいことではない。中国語史の研究により、先秦時代に既に量詞は描写機能を担うものと計量機能を担うものがあったと主張されている。先秦時代には「数詞＋単位詞＋名詞」と「名詞＋数詞＋単位詞」の二つの文法構造があり、前者が描写機能を、後者が計量機能を担っていた。しかし後に後者の文法構造がほぼ消滅し、前者に統一された。これにより現代普通話では「数詞＋量詞＋名詞」構造が多機能になったが、多機能になった多くの部分を、後に発達してきた量詞「個」が担うことになった。

(3) 名詞に付加される量詞が名詞が表す意味を抽象概念から具体的個体へ変化させるという知見は、中国語文法にとってきわめて興味深い。中国語では、形容詞や動詞も単独では抽象概念しか表し得ないため、多くの場合、それらを発話現場と結び付ける要素を付加しなければ容認可能な表現とはならない。つまり、中国語では、名詞・形容詞・動詞において、それ

らの意味を抽象から具体へと変化させる要素が必要となるのである。従来中国語は形態変化を持たないとされ、形態変化を手段とした明確な文法範疇は存在しないと言われてきた。中国語において十分に文法化された形態変化や形態変化に対応した文法範 疇を認めることは確かに困難である。しかし一方で、発話現場の状況と関連した情報を担う付加成分がほぼ義務的に名詞・形容詞・動詞に付加されるという事実は、中国語に「具体化」という広義の文 法範疇が存在することを示唆する。

(4)現代普通話には「動詞＋個＋名詞」という文法構造を活用し、「像個様」「像話」「不是個東西」「不是地方」「是時候」などの慣用表現が存在する。こうした慣用表現に使用される量詞「個」は、名詞が表す意味において必要とされるある基準を満たすことを表している。そしてこの「個」の必要性は、それぞれの慣用表現において若干異なる。その原因としては、各名詞において必要とされる 具体性がそれぞれ異なることが考えられる。

(5)「数詞＋量詞」構造は明・清時代においてすでに多機能であった。そこで、特に量詞「個」を用いた以下の文法構造の意味及び出現する作品について詳細な調査を行った。

①「有」＋「一個」＋固有名詞
②動作動詞＋「一個」＋固有名詞
③判断詞類＋「一個」＋固有名詞
④「把」＋「一個」＋固有名詞
⑤「一個」＋固有名詞が主語になる
⑥動詞／形容詞＋「得」＋「一個」＋固有名詞＋動詞句／形容詞句
⑦形容詞＋「一個」＋固有名詞

清代口語資料において⑥を有するテキストでは④を有し、④を有するテキストでは①を有する、という分布上の特徴を発見することができた。ここから、「一個」が固有名詞に付加される際最も使用頻度が高い基本的文法構造は①だと考えることができる。①における「一個」の主要な機能は焦点化であり、この機能が明清時代に広く用いられていたと考えることができる。そしてこの焦点化機能は現代普通話にも継承されている。

(6)明清資料では、以下の①も広く用いられている。

①動詞＋「他」＋「個」＋A

動詞の意味特徴（授与、獲得、命名や属性の付与、問い、影響、心理活動や叱責、打撃・判断・視覚、影響・実行・変化）やAの種類（名詞、動詞、形容詞、分離不可能名詞、主述句、反復疑問形式、成語）の違いにより、①は多様な意味を表すことができる。ところが、これらのほとんどが現代普通話に継承されていない。これは、現代普通話では一つの文法構造に余りにも多様な意味機能を担わせることを避ける傾向があり、それぞれの意味を表す別の文法手段を発達させたことによる。またその背景として、①中の「個」が明確な意味機能・談話機能を持たないことにも注意しなければならない。

(1)～(6)は量詞という個別の品詞に関する検証結果であるが、これは言語における文法化（grammaticalization）を考察する上で極めて示唆的である。近代の中国語の変化において、文法の精密化が顕著である。すなわち、一つの文法機能語や一つの文法構造が担う意味の細分化が行われ、多義構造が排除されつつある。もちろん(1)が示唆するように現代においても文法構造の多機能性が認められるが、その一方で、意味が希薄化した文法機能語を排除したり、新たな文法構造の発達により旧来の文法構造の意味を限定する、といった一種の淘汰が行われている。こうした言語変化が各地域において均一には発生しないことや、言語使用の現場で常に過去の文法構造への回帰が行われることが、普通話を含めた中国語の多様性につながっているものと考えることができる。

(7)上述のように、本研究では特に「数詞＋量詞」の機能に着目して分析を行った。しかし、当初の目的をより着実に達成するためには、他の文法現象に関しても研究を深めなければならない。本研究では、「数詞＋量詞」以外にも、明清、中華民国初期、そして現代のテキストにより以下のような要素について用例の収集を行った。

①構造助詞のように用いられる「個」
②指示代詞 のように用いられる「個」
③機能の不明確な「個」
④指示機能の弱い指示代詞「這」

①②は現代普通話にも見られ、しかも現代方言では重要な要素であるが、これらの起源についても、明清口語資料に求めることができる。④は今後更なる研究が必要な現象であるが、明清口語において既に存在していたという事実は興味深い。

従来普通話を基礎とした中国語文法の研究はまず「言える、言えない」という規範を打ち立てることを前提としていたが、今後は、自然言語の変化を前提とした研究がより必要になるものと考えられる。本研究はその可能性を十分に実証している。

なお、電子環境を整備する過程において、基本ソフトで用いられるパソコン用語の英語と簡体字中国語・繁体字中国語の対訳集を作成したことも、本研究の成果の一部である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計　１件）
①町田　茂,「個」の基準抽出機能について,中日理論言語学フォーラム,2007年９月２、日，北京大学（中華人民共和国）

６．研究組織
(1)研究代表者
町田　茂（MACHIDA SHIGERU）
山梨大学・教育人間科学部・准教授
研究者番号：20238926

(2)研究分担者
成瀬　哲生（NARUSE TETSUO）
山梨大学・教育人間科学部・教授
研究者番号：20142664

(3)連携研究者

該当無し